

疎開の生活

わが子の疎開

野崎謙三
野崎米子

わが子を疎開

させて—父

確か七月十五日頃の朝と思ひますが、何時もの様に出勤の途中子供を幼稚園に送り届ける積りで、大塚仲町で都電を降り、手を引いて、校門の數十歩手前迄さしかゝつた際、突如警戒警報のサイレンを耳にしました。

豫て幼稚園よりは、こゝいふ際の御注意を細かく承つて居りますので、即座に宅に引返す決心をして、先づ毎日携行して居る包みを開いて路上で、子供に防空服装を整へさせて、仲町迄引き返して都電を待つて

居る内に、附近の國民學校の児童が先を争ふ様に停留所へ殺到して來ました。見ろ見る附近は児童達で埋まり、幸ひ私達は一と足早かつた爲に辛くも乗車出來ましたが、車内の混雑は一と通りではありませんが、た。

私の宅は幼稚園より徒歩しても、幼児の足で二三十分の程度の距離に在りますので、この様な場合には大變心強く思ひますが、車内の児童達の何となく落着かない心配さうな顔色を見てますと、若しこの場合次の瞬間に空襲警報のサイレンが、鳴り渡つたなら、一體どういふ結果になるであらふと、眞剣に考へて見る氣になりました。勿論これまでも、幼児の疎開に就ては戰

局の苛烈化する度毎に、幼稚園よりも御話を伺つて居りましたし、又私の宅でも國策に従つて、荷物疎開等は一部行つて置いたのですが、幼児を中心とする家族疎開となると、何時でも最後の具體的實行方法に何か割り切れないものが残つて、一つには自分の仕事の忙しさにもがまげ、つひその儘になつて居りました。この瞬間(といふと大袈裟で恐縮ですが)これはさうしても、本腰を入れて幼児の疎開を實行しなければならぬもの、咄嗟に決意し宅へ戻つて早速家内に實行方法を相談しました。

疎開先に就ては幸ひ家内の實家の郷里が米澤市に在りますので、少しも迷ふこと無くそちらに行かせる事に決めました。郷里と云つても、家族は平素東京に在つて、家は留守番の老夫婦だけが守つてくれて居るので、疎開には何の氣兼ねも要らぬ慈まれた條件と云へませう。

偶々夏休みも近づき、夏季保育に就て幼稚園より御知らせがあり、其の中に「疎開の御薦め」といふ一項を拜見しましたので、これを幸便に早速先生に疎開の御許しを願ひ出で、一方直ちに準備にかゝりました。

私の宅では昨年女中が郷里へ歸つてしまつて以來、人手が無く暮して居りましたが、加へて幼稚園の兒の下に最も、手のかかる誕生間際の赤坊が居りますので、この様な場合には、非常に困りました。家内は配給と炊事と赤坊に追はれ乍ら片手間に片付ける事なので能率更に擧らず、僅か子供達の身の廻り品と當座の日用品を取り揃へて、小荷物で送り出すだけの事ですが、準備に數日を要して實際の出發は、七月三十一日になりました。

此の間戦局は愈々苛烈の度を増し、痛ましくもサイパン、同胞玉碎の悲報の發表もあり、老幼や學童の疎開は最早國家の方針として行はれる状態になりました。偶然にも私共の決心は、僅か數日とは云へ國策に一步先んじて、而もこれに従ふことになつた譯です。

出發に就ては、車中手廻り荷物や子供達のこともあり、心配しましたが、好都合な事に、二十日前後には、私自身社用で東北に出張する豫定がありましたので、それを兼ねて現地まで送つてやることにしました。

汽車は食事の關係上十九時發の夜行を擇び、折から東北方面風水害による交通事故のため、奥羽本線は車内大變混みましたが、翌二十二日早朝兎も角も無事に現地に送り届ける事が出来ました。

× × ×

扱、子供達に母親をつけて疎開地に送り出してしまふと、私の家庭では、東京に残留するのは、自分が獨り丈になります。自宅の管理、三度の食事、配給品の受取り、防空訓練等、平時と異り随分、雑用が多く、其他色々の不便、不自由や困難は、現實となつて俄か鯨夫に對して一度にぶつかつて來ました。

豫め覺悟はしてましたが、いざとなると仲々大變な事はかりで、眞實なところ最初の一週間は可成辛い氣もしましたが、だんだん獨りすまるも勝手が解つて來て生活にも慣れ、幸せな事に親類が直ぐ近所に在つて面倒を願へる事と、隣組の方々が何かと御親切にして下さいますので、さうやら切抜ける自信がつかました。

この四週間の経過して感じます事は、私の宅の様な疎開の仕方でも、後に残る者の

問題は自分自身が恒に健康でさへあれば、方法如何にもよる事でせうが普通の人なら、何とか解決が出來得るのでは無いかと、申上げる事が出来る様に思はれます。

大戦争を戦つて居るといふ非常時意識が、不便不自由を忍耐させてくれるは勿論ですが、何といふても自分を一番勇氣付けて呉れるのは、やはり極めて大きな一つの安心感であると思ひます。

「呪はれた様な敵機の爆彈の破片や爆風が、萬一にもお前の幼い子供達を傷けたらどうするか？」といふ質問に對して、自分のところに限つてそんな事はあり得るものかとも、その位は、戦争して以上當り前の事ぢやないかとも、空嘯いて濟ますことの出來ない私共の様な人間は、その質問に適當な答を考へ付く先に、酷らしく泥と血に塗れた小さい掌や、爆風に打たれて失神したり、凄じい火焔や煙に巻かれて倒れる幼い兒の姿が、幻影となつて目の前に大寫しにあらはれて來ます。

撃たれても破壊されても、何糞と愈々火の玉となつてどこまでも家を護り、職場に噓りつかうとする日本人の闘志を傷け得る

ものが若しあるとすれば、それはこの悲惨な幻しでは無いでせうか。この幻影も妄想も微塵に打碎つて、空中にけし飛して失つた喜び、何にも代へ難い大きな安心感こそは、幼い者を疎開させて初めて感じ得るのであります。孤獨、寂寥の如き弱々しい、小さな感傷は、この偉大な安心感の前に影も無く消失して失ひます。

子供が地方に疎開して次に楽しみなのは、空氣の良い環境の清浄な天地で、手許から離れてる間にどんなに、丈夫に育つて行くかといふ事と思ひます。都會の濁つた空氣の中で、殊に昨今の様な不足勝の榮養で、押へられて来た子供の健康が、燦々と日光を身體一杯に享ける廣い天地で、弦を離れた矢の様に、うんと喰べ、高く跳び撥ねて、眞黒に逞しく伸び、ケン／＼育つて行く、見違へる様に肥つて大きくなつて居る。

この様な想像は、單に想像だけでも親として、充分楽しい事で御座いますが、疎開する事が、現在の都會地では到底望めないこれ等の希ひを、可能に近くしてくれる期待は實に大いなる喜びであると思ひます。

米澤の家は町の郊外に近い處にあつて、庭の直ぐ前から廣い田圃が連つて居る、半田圃的環境に在ります。庭から一步垣根の外に出れば、綺麗な水の流れる小川があり、それを跳び越せばすぐ青い稻が手に觸れます。疎開した最初の日で、まだ夜行の疲れが喉の邊に残つて見えるのに、子供はもう外に飛び出して名も知らぬ野草を摘んだり、おはぐろ蜻蛉を追つたり、流れに脚を浸したり夢中で喜んで居りました。手に觸れ、眼に映る總てが自然其物である疎開地の世界が、都會で育つて来た子供には、全く驚異と好奇の對象である様でした。

自然に觸れ自然と遊んで行く間に、自ら享ける大自然の感化は、幼い兒にどんな大きな好い影響を與へて呉れるかと、傍で見ると私は嘗て無い嬉しさを覺えて歸りました。

うちの子供はどちらかと云へば、感受性の鋭い、云はゞ神經の細かすぎるたちの兒の様に思はれます。幼兒としては寧ろ届きすぎると思はれる注意力が、都會の繁雜な日常事から、大自然に振り向けられて、幼い科學する心を培ひ、一方幾分尖がりすぎ

て居る角を圓くして呉れる。自然に親しんで、何により私が女の兒に望んで居る、優しい情操が養はれる。色々な快い空想が次から次へ想ひ起されて、子供の日々の生活の一駒一駒を楽しく幻想する事が出来ま

す。都會に生まれ今迄都會を離れず育つて来た子供が、この田舎の風物に接する機會を得ましたのは、疎開の御蔭とも云へます。

幼兒の個性や生活を正しく觀察して上手に保育することは、幼稚園より御指導を頂いて、何時も一生懸命努力して居る積りではありますが、宅の子供の場合は長女でもありませんが、何事も斬らしい経験であつて、保育する事それ自體に追はれて、これを判断しつゝ適當な方針を決めて行く餘裕の無い事を子供のために兼ね兼ね残念に思ふて居りました。子供が長期間身邊から離れて而も朝夕兒の上を考へながら生活することは、それがふた親のいづれか一方である場合でも、子供の育て方とその結果について、靜に反省する時間が與へられます。今迄も職業上、私自身は、随分長期間の出張等でこの様な場合が無いわけでもありま

せんでしたが、そういう場合は何時も仕事

其の物が、中心で他を省みるゆとりが無く仲々この様な閑が無いのが常でありました。どなたでも同じと思ひますが、自分の生活が平常の譯であつて、然も或期間子供と離れて暮すといふ事は、私の様な職業を持つ者には、殊に仲々求め得難いものです。これは何も疎開に限つた事ではありませんが、疎開が奇縁で偶然にもこの様な機会に出遭したことは或意味で有難いことと思ひます。幼児の健康上のこと、習慣や躰の上のこと、其の他色々の點で家内と協力して行つて来たことが、其の主旨や努力の如何に拘らず、結果が擧つて居つたかどうか、行き過ぎではなかつたか等、悠つくり獨りで考へて見て、今後子供を育て行く上に、指針を定める貴重な資料と致したいと思ひ、疎開のこの副産物的結果を有効に利用したく考へて居ります。

× × ×

子供達を送り出した後の家の中は、文字通り無味乾燥で、室内が俄に廣くなつた様にさへ思ひますが、重荷を卸した様な気軽さは、敵機何時でも來らば來れの餘裕と自

信を與へてくれる様な氣がします。

この稿を認めるすこし前、私は出張先の關西某地で深夜に空襲警報に見舞はれました。不氣味であるべきサイレンが疎開の前、子供と大塚仲町で聞いた警戒警報のサイレンより遙に軽く耳に達した様な氣がしました。そして、我乍ら可笑しい程落着きをもつて適宜の待避處置をとる事が出来ました。これ等も申す迄も無く、子供達は安全だといふ氣持が大いに働いて居る爲と思ひます。

何から何までよく考へると、うちでは結局疎開は無理ですから……とは屢く知人から聞く言葉ですが、これは要するに現在の生活に、御自分も家族も、餘りに執着を持ち過ぎる爲では無いかと思ひます。

ハンブルグや、伯林での盲爆が二・五坪乃至五・〇坪に一彈の割合で行はれたといふ、近代戦の實相を冷靜に見ることが出来れば、國の寶である幼児をお持ちの方々は、相當と思はるゝ障得も、思ひ切つて生活様式を切り換へる事によつて乗り越えられない筈は無い譯で、問題は結局、懸つて最初の踏切り方一つに決するものと思ひます。

私の親類でも、私達が口火を切つた様な事になつて、乳幼児を持つ若いお母さん達で、家を外に家族疎開された方が、引續き數組にのぼりました。

(筆者は建築技師)

〇わが子と疎開 して―母

懐かしい幼稚園の先生方やお友達とお別れして米澤にまゐりましてより、早や一ヶ月近く経ちました。その間一度八月四日に警戒警報のサイレンを耳に致しました。東京に居りますれば、サイレンの鳴り終りませぬうち早くも全身の緊張を覚え、萬全の用意に寸時の油断も出来ませぬのに、こゝでサイレンを聞きました時には、直ちに燈火管制の用意を致しましたのみでいたづらに神経をいらだたせることなく穩かな心で子供達を見守ることが出来ました。子供にとりまして、米澤は祖父が幼時育ちましたところとして、かねてより關心を持ちあがれて居りました。それ故出發準備中も早く行き度い早くまゐり度いと、大好きな

幼稚園にしばらく上れなくなりますつまらなさも忘れてよるこんで居りました。情、米澤の驛に着きましてから厚生車とて自轉車のついた人力車に乗り約十丁ばかり離れたところにごさいます家までまゐりました。子供は生れてはじめて乗る厚生車の珍しさにまづはじめに大よろこび致しました。午前四時頃驛に着きましたので、明方の清々しい空気を吸ひながら、東京に比べますと本當に質素な田舎家だの、青々とした田圃だの、見事な南瓜を實らせた風根だのを見ましてたゞもう目に新しいことばかりにて珍しく、一言も口をきかず外の景色を一生懸命眺めてまゐりました。

私共の今居ります家は數年前に建てましたものでございます。祖父の育ちました舊い家は、大正六年五月に起つた米澤の大火で焼けてしまひましたため形がなく、先祖代々傳はりました家に子供達を住まはせることの出来ませぬのを残念に思ひますが、この土の上で、「御祖父様も幼ない時にお遊びになつた。」といふことを知つて、子供も非常に懐かしく思つて居ります。この邊は東寺町と申し賑かな町からはづれて居りま

すため大變に閑靜なところでございます。家の東・北二面には田圃があり、西側には畑がございます。南は庭になつて居りまして、田圃の傍を流れる小川の水が入ります様に出来て居ります四坪程の池がございます。東寺町といふ町名の示します如く、近所はお寺の多いところでございます。

米澤は盆地と聞いて居りましたが全く其の通りで、四方をちらを眺めましても山でございませぬ。朝に晩に様々に變ります雲の姿に其の山々が遠くなり近くなり、又高くなり低くなり、茜色になり緑濃くなり、いつまで見て居りましても見あきるといふことがございませぬ。時には傍にて山がすつかりかくれてしまふことがございます。又雲に高い山がかくれ手前の低い山だけ見える時等子供は「お山のかくれんぼ」と申しまゐります。米澤に着きまして二日目の夕方、夕立のありました後、山から田圃にかけて虹の美しい掛橋を見まして、東京ではなかなか見られない景色に大よろこび致し、早速、クレオンで虹のお畫描きを致しました。

東の田圃道を通つて三丁ばかりまゐりますと、最上川の上流松川の流れがございま

す。河原が廣く、綺麗な水が淺くゆるやかに流れて居ります。土地の子供達はこの川で水浴を致します。そこへ時々まゐり、河原で遊びますのを、楽しみに致して居ります。

雀の元氣な囀りと、その雀を追ふ「ホーホー」といふお百姓さんの聲に目をさまし、大抵五時半から六時頃までには床をはなれまゐります。寒い井戸水でしばつた手拭で、冷水摩擦をして洗面をすませますと、直ぐ洋服を着て外に出て、裏庭にあります鶏小屋にまゐります。十羽飼つて居りますが、留守居を頼んで居りますをちさんをばさんの丹精でよく太つて居ります。もうすつかり仲好しになりまして、一人でどん／＼小屋に入り、巢箱をのぞいたり、鶏を抱いたりして一しきり遊びます。畑から青い葉を取つて来て鶏にやりますことも楽しみに致して居ります。そのうちに、姉に負けずに早起き致しますお誕生過ぎたばかりの赤坊が外に出たがり催促致しますので、私が掃除や御飯の支度に忙しくして居ります間、おぶつたり抱いたりして、お庭のお池の鯉を見せたり、畑に出て唐もろこしの廣い葉に澤山

ついで遊んで居ります親指位の青蛙を見せたりして遊んで呉れます。朝食が済みますと、三丁程はなれたところにございます牛乳の配給所まで妹の牛乳一合を取りに行つて呉れます。手提に牛乳のびんと券とお金を入れてあります。今までのおつかひは、回覧板廻しか、物を近所のお家まで届けたり頂いて來たりすることか、郵便出し位で、お金を持つてのおつかひは米澤に來てはじめて致させました。自動車や電車等乗物の危険がございませぬしよるこんでおつかひにまゐりたがりますので牛乳取りの責任を持たせることといたしました。今までお金の勘定は少しも教へてございませぬでしたが、牛乳一合十三錢致しますので、これを機會に十錢玉は一錢が十枚集つたものであること、五錢玉は一錢が五枚集つたものであること、十三錢は十錢玉一枚と一錢玉三枚でよいこと、小錢が足りなくて、十錢玉一枚と五錢玉一枚と合はせて十五錢持つて行つた時には、一錢を二枚返して呉れること、お店屋さんから返して呉れるお金をお釣りといふことなど苦勞せずにお覺えしました。牛乳屋から歸りますと、朝のうちはお

晝描きや御細工や東京に居ります父等への御手紙書き等を致します。少し机に向つてからお晝の食事まで外に出て、池や小川で遊んだり、蟬のぬけがらを見つけたり、とんぼを捕へたり、なばきんと一緒になつて馬鈴薯掘りをしたり、隠元豆をとつて來て冬の用意に干す御手傳ひをしたり干したお豆をはじいたりして元氣に遊んで居ります。まゐりました頃はこの家でも麥打をして居りましたが、摺古木の太い様な棒を手にして板の上で麥の穂を「トントン」と叩くとばら／＼と實が落ちますのが面白く、麥打ちがはじまりますといつもそのそばでじつと見て居りました。時には町までのおつかひについてまゐります。十丁以上どうしても歩かなければまゐれませぬので、だん／＼に足が強くなつてまゐりました。午後は一時間位赤ん坊と一緒にお晝寝を致します。お晝寝から起きますと晩の食事まで又外で遊んだり妹を遊ばせたり時には御本を讀んだり致致します。夜は大抵七時半か八時頃までにやすみます。晝間元氣に遊びますので、枕につきますとすぐ眠り、朝までぐつすりとよくやすみます。日中は

東京と大差ない位お暑さが酷しうございませぬが、夜分冷えますので晝冷えを致さない様特に注意致して居ります。

清い空氣を吸ひ日光を思ふ存分全身に受けて毎日戸外で遊んで居ります故か、もう早や土地の子に負けない位色が黒くなりました。食慾も増し好き嫌ひはいはなくなりましたので顔が丸く肥つてまゐりました。

當地へまゐりました時には子供の背丈の半分位でした稲が八月になりましてからだんと穂が出揃ひ、ぞん／＼伸び、今では子供の背一杯位になりました。暑い日盛りから夕方暗くなるまで田の草取りをして居るお百姓さんの姿を直ぐ縁の先に見て、田を荒しに來る雀を防ぐためか、しや唐傘や棒を田に立てたりすることを覺えました。

又朝早く夜明けと共に田圃に立ち「ホーホー」と雀を追つて居るお百姓さんの眞剣な姿も見ました。そしてお米が出来るまでのお百姓さんの苦勞がぞんなに大變であるかを實際に眼で見たり子供に納得出來ましたことは大變尊いことと思つて居ります。まだまだこれからもこの様に東京では得難い尊い體驗を澤山、子供に致させることが出來

ますことを楽しみに存じます。私共の宅は町はづれでございますため、お醫者様の便が悪うございますので子供達の健康には東京に居りました時に倍して注意致して居りますが、お蔭様にて只今までは少しも障り

疎開地に於ける子供の生活

阿部 廣司

私の子供は六月二十二日に福島縣平市の母方の里へ疎開しました。子供は里歸りのつもりで、よろこんでゐます。

子供は疎開していくと直に私のところへ端書をかきはじめました。二日か三日おきに一枚づゝ端書がきます。田舎で御馳走になつた珍らしい果物、田植、田の草取り、人形遊びの繪など端書全面に描いてゐます。このころでは文字を書くことをおぼえてきて、繪は端書の半分にかき、下の半分には鉛筆で「オトカサン アツイテセウ」とか「コレハオイシイモメデス」とか書いてくれます。近頃は端書が容易に手に入らないから畫用紙や包紙などに書かせてまとめて

なく元氣に致して居ります。

これから先もお國のためこの米澤で子供達を、皆様の御期待に背かぬ強い日本の子に育て、まゐり度いと覺悟を又新に致して居ります。(謙三氏夫人)

送らせるやうにしてゐます。疎開してはじめて、子供は便りを書くといふことに興味をもつやうになりました。そのため、繪を畫くことも、文字など書くことも獨りで上手になつてきたやうです。近頃では先生や、兵隊さんへも端書をさしあげるやうにさせてゐます。

次に疎開幼児の親として感じたことは幼稚園教育の有難さです。疎開地の子供の生活は幼稚園生活の延長です。子供は御飯ごき食卓に向へば必ず兵隊さんありがたうと言つてからいただきます。幼稚園で羨けていたといふ作法を、里へ歸つて實踐してゐ

ます。

子供の遊びも幼稚園で遊んでゐたそのまゝをやつてゐます。このころは幼稚園生活を發展させる意味で、幼稚園で作つたものを想ひ出させて作らせてゐます。繪は氣がむけは何時でも描けるやうに藁半紙を與へてあります。この間歸つてみたら作品は皆んな机の上にならべてあるし、繪は神棚の下に貼りつけてありました。よく田舎の子供は習字や繪を神棚の下に貼る習慣がありますので、子供もそれにならつたのださうです。

唱歌は田舎では新しいものを教へることもできないので、散歩に出ても、庭に遊んでゐても、幼稚園で習つた唱歌遊戯で楽しさうです。この唱歌遊戯は子供としては一番自信あると見えて、疎開先のお友人にもやつてみせます。身は幼稚園を離れても、子供の心はいつも幼稚園で育つてゐるやうなものです。また幼稚園の児童であるといふほこりが日々の生活の隨所に見られ、又どんなにか子供を力づけてゐます。

私の子供は脚が人より弱い子供でありま